

# 社会医療法人財団 石心会 川崎幸病院 内視鏡センター

【住所】神奈川県川崎市幸区大宮町31番地27 【病院長】石井 映禧 先生 【病床数】326床 【内視鏡検査・治療総件数(平成23年度)】上部内視鏡検査2,290件、下部内視鏡検査1,546件、ERCP246件、気管支鏡104件、緊急内視鏡552件、上部EMR/ESD49件、止血術163件、EIS/EVL33件、PEG74件、下部EMR/ポリペクトミー420件、EST/EPBD99件、結石除去術131件、胆管ドレナージ術151件 【内視鏡室スタッフ】常勤医6名(内視鏡学会指導医2名、内視鏡学会専門医1名、後期研修医2名)、非常勤医1名、看護師：7名(内視鏡技師4名)、コメディカル：6名(内視鏡技師3名)、事務：1名 【保有内視鏡本数】上部用9本、下部用7本、十二指腸用2本、小腸用1本、気管支鏡3本、超音波内視鏡コンベックス式2本(うち気管支用1本)、胆道鏡 1本、カプセル内視鏡システム1式

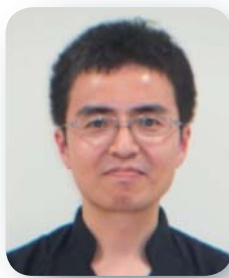


## 新病院誕生でさらに機能強化した内視鏡センターで 地域に信頼される質の高い医療を実践

### 待望の新病院が6月1日について誕生 地域の高度急性期医療を支える機能強化が実現

川崎幸病院は、昭和48年の開設以来、川崎市幸区を中心に川崎市南部および横浜市北部を診療圏とする地域の中核病院です。平成10年9月には一般外来を「川崎幸クリニック」として分離独立し、他院に先駆けて急性期機能をより強化充実させてきました。平成13年11月には、急性期病院モデルとして神奈川県で初、全国で9番目の急性期特定病院加算を取得し、平成17年4月に救急部を設置しました。病院の方針として「断らない救急」を掲げて救急医療に尽力しながら、医療センター化や地域の臨床研修病院として地域医療の要として機能しています。今年6月1日には、川崎幸病院中原分院を統合した新病院を川崎駅前新築移転し、最新の医療ニーズに応えるべく機能強化が実現しています。

新病院への移転を機に、内視鏡診療に特化した内視鏡センターが誕生しました。内視鏡センターは消化器部門と呼吸器部門の2つの部門で構成され、各学会の指導医、専門医を配置して内視鏡診断と治療に関する先進医療を提供しています。消化器内科の副部長で消化器部門を統括されている大前芳男先生は、「内視鏡センターでも救急医療には特に力を入れており、医師、内視鏡技師、救急担当の看護師の最低3名体制で、受け入れ先が困難になることもある吐下血の救急患者搬送を24時間受け入れ、必要であれば緊急で内視鏡的止血術を行っています」とご説明いただきました。



内視鏡統括医師  
消化器内科 副部長  
大前 芳男 先生

また洗浄器の履歴管理を院内の電子カルテシステムに連動させるなど、感染対策を徹底しています。患者さん用のTVを設置した前処置室、プライバシーを配慮しカーテンで区切られたリカバリースペースなど、患者さんのホスピタリティを高める様々な工夫がなされています。大前先生は、「新病院になる際に一番強く希望したのが内視鏡ブースを増やすスペースの確保とリカバリースペースの設置です。旧病院はとにかくスペースが足りなかったため、内視鏡のベッドも2台しか置けず、緊急内視鏡が入ると通常の検査などで来院された患者さんをお待たせしてしまうことがありました。また、施術後にゆっくりお休みいただけるリカバリースペースを確保できたことで、希望する患者さんにはセデーション下で楽に内視鏡を受けていただけるようになりました」とご説明いただきました。特にリカバリースペースの最新のリクライニングチェアは非常に快適と、患者さんからの評判も上々のようです。

内視鏡のスクリーニング検査は一般外来を受け持つ川崎幸クリニックが担当しているため、同院の内視鏡センターでは主に拡大内視鏡やNBIを用いた精査を目的とする検査や、胆膵内視鏡、大腸ポリペクトミーやESDなどの治療内視鏡を中心に行っています。大前先生は、「拡大内視鏡は2005年に私が赴任した際に大腸用を導入し、NBIと上部の拡大内視鏡はその後2007年に導入しました。どんな治療でも正確で確実な診断が大前提です。機器の導入で診断能が上がれば患者さんの利益になるため、比較的早期に導入を決めました。新病院になってからはコンベックスタイプの超音波内視鏡とダブルバルーン小腸内視鏡を導入し、また統合前の分院にあったカプセル内視鏡が入ったことであらゆる領域の高度な内視鏡診療が行えるようになりました」とお話になり、中でも超音波内視鏡はFNAやEUSドレナージで今後活用していきたいと考えておられるそうです。

セデーションを用いるこれらの高度な内視鏡治療を行う上で、安全性への最大限の配慮が必要となるため、これらの処置は緊急内視鏡も含めて術者と介助の内視鏡技師の他に、バイタルのモニターをチェックする看護師を配置して行っているそうです。「リカバリースペースも看護師の目の届くところに配置して患者さんの状

### 最新機器を備えホスピタリティに優れた内視鏡センターで 高度で良質な内視鏡診療を提供する

高度先進医療の提供を使命とする内視鏡センターでは、新病院への移転でレイアウトと設備を拡充しました。まず、旧病院では2部屋だった内視鏡検査室を4部屋へ増やし、専用の処置室も1部屋設けられました。患者さんと医療スタッフの導線は完全に分け、

▶次ページへつづく



Defining tomorrow, today  
in Endoscopy.

態を常にチェックするようにしていますし、また当院は研修施設でもあるのですべての処置が1か所で集中モニタリングできる部屋を確保し、機材を設置しております」と、安全対策についても大前先生にご説明いただきました。セデーションに関しては、大腸内視鏡では疼痛や違和感などがスコープ挿入の指標となり、患者さんが痛みを感じないように手技を進めていくことも重要であるため、希望者以外にはあまり積極的にセデーションを用いていないそうです。



清潔で整理整頓された内視鏡処置室



ゆくり快適につくられるリハビリスペース



徹底した履歴管理が行える洗浄器



内視鏡処置のようす

### 個人の能力に合わせてじっくり指導する教育体制で チーム医療を担う優れた人材を育成

同院は教育研修施設としての役割も担っており、人材育成にも力を入れています。現在2名の消化器内科後期研修医が研修中ですが、研修医の受け入れは随時行っているそうです。大前先生は、「研修医が手技に入るときは、必ず上級医がマンツーマンでつくことになっています。後期研修4年の間にESDまで含めて一通りの内視鏡検査及び治療ができるようなカリキュラムを組み、段階ごとに技術を習得して先に進むようにしています。次のステップに進めるかどうかは技術の習熟度で判断するので、飲み込みが早い人は技能に合わせて早く先に進むこともあります。私個人の考えでは、内視鏡のスキルが必ずしも症例数に比例するわけではないと思います。もちろん経験は重要ですが、自分の行っている検査や治療の目的や内容など、その本質をよく理解しているのが重要で、何も考えずに件数だけこなしても技術は習得できないと思います。後期研修の4年間というのはあくまで目安であり、勉強熱心でやる気があればもっと早く一人前になる人もいるでしょう。そのため、上級医がしっかりマンツーマンで評価しています」とご説明いただきました。手技の介助には内視鏡技師がつかますが、若手の医師には経験豊富な内視鏡技師が介助についてサポートし、反対に上級医には経験の浅いスタッフが介助について勉強するなど、医師とスタッフが協力して教育を行いながらも、医療の質を落とさない工夫をされています。

同院では外来をクリニックが担当していることもあり、月に1回内視鏡委員会が開催されています。ここには、同院とクリニックの医師、看護師、検査技師、クラークなどが一同に会し、問題点や改善

点を話し合っているそうです。患者さんはクリニックで検査を受け、その後内視鏡センターで精査もしくは治療を受けることになるので、整合性を取るため説明の資料や問診票などは内容を刷り合わせて同じものを使うようにしたそうです。院内だけでなくクリニックも含めたメンバー全員が情報を共有し、顔を合わせて連携することで、患者さんが接するあらゆるレベルの職員が均質なサービスを提供することができています。

### 開業医との顔が見えるコミュニケーションを継続し 地域全体で患者さんを支える地域医療を推進

内視鏡センターでは、登録開業医から依頼を受けて必要な検査や治療を行う「オープン検査」を提供し、地域の医療機関との病診連携を推進しています。検査や治療の結果は直接紹介状に記載して紹介元の医療機関へ送られますが、年に2回ほど「病診連携の会」を開催し、より詳細なフィードバックを行っているそうです。大前先生は、「前は20名程の開業医の先生が参加されましたが、ご紹介いただいた患者さんに行った検査や治療の内容を直接ご説明してご質問にお答えするだけでなく、患者さんが地域にお帰りになってからどのように過ごされているかをお聞きすることもできるので、とても良い情報交換の場になります。また、地域の先生方の要望に応えるために頑張らないといけないと実感する機会にもなります」とコメントされ、この会のさらなる発展と継続を願っておられました。また大前先生は、患者さんの情報だけでなく最新の内視鏡手技についても病診連携を通じて情報提供しているそうで、「拡大内視鏡を最初に導入した際には、大腸ポリープを生検せずに診断できるお話を開業医の先生方にしたところ、かなり興味を持っていただけました。その後、当院で行う診断と治療に良い評価をいただけて、またそれが地域に広まっていったため、紹介の数が急激に増加しました」とお話しいただきました。

地域医療に貢献するため、休む暇のないほど多忙な急性期医療の中心を担う内視鏡センターのみなさん。地域の患者さんが安心して暮らせるために、また地域の開業医の先生方がいつでも頼れるように、院内外を問わず様々な人たちと連携し、地域規模のチーム医療を築きあげておられる、そんな印象を受けました。



内視鏡センターのみなさん